

## 総合講座Vの教室から

——発足三年後の報告——

平 田 澄 子

大学改革の一環として文教大学においても早くから一般教育科目の見直しが行われ、越谷校舎の総合講座Vとして古典演劇学習の場が2コマ与えられた。講座担当者にとっては大変喜ばしいことであり、スタートして三年経つうちに、心なしか学生の中にも日本の伝統演劇に対する関心が高まって来ているように感じられるが、これは単なる希望的観測に過ぎないのかもしれない。

田口・平田の担当になる1コマの方は半期の講義を聴講するかたわら、成績締め切りは直前までに学生銘々が能・狂言の公演を二回（能と狂言は通常一回の観劇で、どちらのジャンルも体験できる）、歌舞伎・文楽の公演をそれぞれ一回ずつ、合計四回鑑賞し、その都度レポートを提出することになっている。劇場へ直接足を運び、舞台を実見するという体験がなければ、伝統演劇への真の理解も関心も湧き起こらないであろうという考えから、このような方法を考えたのである。

さて、こうして始まった講座であるが、提出された学生達のレポートを読むと、やはり実際に舞台を見た者でなければ書けないような、古典演劇に対してのユニークな鑑賞の視点や鋭い演技批評、日本文化批判などに会うことができ、指導する立場からも興味深いものがあつた。そこでこの度、本紀要のページを借りて、三年間に積もった延べ百三十人分程のレポートを整理し、その一部を紹介することとした。それらの中から現代の若者一般に共通する古典演劇離れの原因となるものがあぶり出せれば、今後の指導の指針ともなろう。またさらにこの、レポートの

レポートを通じて、日本文化の一翼を担う古典演劇の、その鑑賞入門を第一義とする本講座に対して、おおかたのご理解が得られれば幸いである。

## 1 レポートの一般的傾向

今までのところ受講者のほとんどが、古典演劇には興味を抱きながら、実際の舞台は見たことがないという人達である。初めて古典演劇の実演に触れた彼らは異口同音に伝統の素晴らしさを力説している。これは勿論学生達の、私共教師に対するサービス表現であるかもしれないが、素直な反応でもあると思いたい。例えば能劇場の中で、彼らは日常生活と異なる厳粛な雰囲気を感じ取り、囃子の音に耳を澄ませ、謡の人のわずかな身の動きに目をやってはその意味を必死で考えようとしているが、狂言に比べて観劇に苦勞のいることを率直に訴えているものが多かったりもするからである。

歌舞伎の場合は演目の違いによって理解度も感想もさまざまであるが、総じて四種の演劇の難解さは、能、文楽、歌舞伎、狂言の順になるようで、言葉の壁は能が一番厚いらしい。学生に分かりやすく、最も好意をもって迎えられている舞台は狂言であり、その喜劇性である。

能と文楽は様式や演者の技芸にカルチャー・ショックを受けても、謡いや義太夫節の言葉が聞き取れないため、ドラマの世界にまでは理解が及ばないという傾向が見られ、入試科目に古典がなかったので古語に疎いと嘆いている学生も少なからずいた。文学部の学生では中国語中国文学科に比べ、英米語英米文学科の学生に古典劇苦手意識が強いようでもあり、これには古語との距離の差が関係しているに違いない。

オペラや京劇などの公演が、舞台に字幕を設置することによって多く

の観客の心を掴んでいるという事実もあるように、古典演劇においても台本の古典語を現代語訳で示すような工夫があれば、難問の一つはとりあえず解決されるのではないかと推測される。イヤホンガイドを借りて歌舞伎を見た学生が、能にもこれがあれば助かるのにと書いていた。

熱心な学生は講義をしっかり聴いて、鑑賞に役立てるばかりでなく、鑑賞する演目についての学習を事前に行ったり、劇場に用意されているパンフレットにくまなく目を通したりしている。このような学生のレポートには確かに鑑賞演目に対する理解のより深さが現れていると言える。

が、それでも能では眠ってしまったと遠慮がちに告白している者が多い。しかし筆者の学生時代にも能楽研究の権威である先生が「観劇中居眠りするのが能の醍醐味である」と冗談まじりに言われたくらいであるから、能鑑賞初体験者の居眠りなど当然のことと言えよう。むしろ居眠りの合間に囃子のリズムと現代流行のニュー・ミュージックのそれとを比較検討していたり、舞台衣装の色や模様の細部まで観察して自分の生活の中に類似のものを見い出したりと、それぞれにユニークな鑑賞法で舞台を楽しんでいるしたたかさが、さすが現代の若者だと感心させられるのである。

## 2 鑑賞演目について

次に1で見たような傾向が、どのような演目に接した結果のものであるのかを知るために、ここでは三年間を均して学生達が鑑賞した作品と、鑑賞者の数を表にまとめておくことにする。ただしレポートの中には自分の鑑賞した演目の名を全く記していないものがいくつかあって、受講生の数と表の人数とは必ずしも一致しないことをお断りしておく。

学生が足を運んだ各公演は、能・狂言は田口が、歌舞伎・文楽は平田

があらかじめ講義の時に推薦したものが主となっている。

表1 能鑑賞演目一覧表

演目名	人数	演目名	人数	演目名	人数
葵上	1	通小町	2	巴	6
芦刈	2	清経	1	半部	4
安達ヶ原	3	鞍馬天狗	1	芭蕉	1
黒塚(群読)		小鍛冶	4	三井寺	10
鶉飼・玉鬘	19	護法	3	紅葉狩	2
箆	9	須磨源氏・熊野	1	屋島	11
杜若	10	隅田川	2	籠太鼓	3
鉄輪	3	龍田	9		
賀茂	6	土車	1		
賀茂・田村	6	融	2		

表2 狂言鑑賞演目一覧表

演目名	人数	演目名	人数	演目名	人数
粟田口	2	空腕	2	文荷	3
伊文字・井礪	3	三本の柱	5	仏師	2
お冷し・貰婿		腹不立・葺		引敷舞・文荷	1
入間川	3	太刀奪	10	塗師平六 他小舞	
因幡堂	10	名取川	9	樋の酒	6
魚説法	5	萩大名	1	盆山	1
瓜盗人	11	人を馬・花争	2	棒縛り	1
伯母ヶ酒	4	伯母ヶ酒・鈍太郎		松樫	1
蝸牛	14	盆山・千鳥	1	瘦松	19
菊の花	3	博奕十王		呼声	1
清水	9	富士松	10	演目不明	2

日本語日本文学科と教育学部初等教育研究室合同の文教大学国語国文学会が毎年行っている国立能楽堂の能楽鑑賞教室、国立劇場の歌舞伎鑑賞教室は学生団体割引の廉価が好評で、大いに利用されている。他に能・狂言は国立能楽堂の自主公演、鏡仙会能楽研究所で催される青山能や「蝸牛の会」のアトリエ狂言会、宝生能楽堂の鏡仙会定期公演、越谷市主催の薪能や閑能会定期公演など、歌舞伎は歌舞伎座、国立劇場の各公演や渋谷bunkamuraのコクーン歌舞伎、越谷サンシテイ・ホールで年一回行われる松竹大歌舞伎など、文楽は、ラフォーレミュージアム原宿で原宿文楽のあった初年度を除くと、開講中唯一の観劇機会と言ってよい国立小劇場の五月興行などを紹介している。

また歌舞伎では歌舞伎座的一幕見も認めることとした。地下鉄日比谷線の東銀座駅目の前の歌舞伎座は、文教の学生にとってはお誂え向きの便利な場所にあり、映画を見るような時間感覚で楽しめる鑑賞法もあることを若い人に知って貰いたいと思ったからであるが、これには一つ問題のあることがレポートを見て分かった。一方、文楽は鑑賞の機会が少ないので、残念ながら当初の計画を変更し、歌舞伎鑑賞をもって代替しても良いとせざるを得なかった。

初年度は講義期間中たまたま早稲田大学付属の演劇博物館において「景清展」という画期的な催しがあったので、これも歌舞伎鑑賞一回に代えてよいこととしたら、思いのほかこれに参加するものが多くて驚いた。考えて見れば、これは入場無料であったし、会期中自分の都合のよい時間と合わせやすいという格好の条件を備えていたのであった。実演の迫力にはとうてい及ばず、所期の目的からも外れたものでもあったが、古典劇の中の登場人物としては重要なキャラクターの一人である景清という人物を、文献資料、演劇舞台の資料などを駆使して通史的に見られるように組み立てられたこの展示は、学生達には刺激的であったようで

ある。演劇博物館の存在そのものを知るだけでも意味のあることであり、特に、日ごろ文教以外のキャンパスを覗く機会のない学生にとっては大いに新鮮な体験ができたようであった。

表3 歌舞伎鑑賞演目一覧表

演目名	人数	演目名	人数
妹背山婦女庭訓(吉野山・御殿)	3	時今也桔梗旗揚	2
妹背山婦女庭訓(御殿)	3	時今也桔梗旗揚	4
幡随院長兵衛・道行旅路の嫁入		英執着獅子・鯛壳恋曳網	
江島生島・籠釣瓶	2	釣女・傾城反魂香	2
籠釣瓶	5	三人吉三巴白浪	
傾城反魂香	9	番町皿屋敷	15
天衣紛上野初花	7	独道中五十三駅	2
恋飛脚大和往来	1	双生隅田川	3
新皿屋敷月雨暈(魚屋宗五郎)	10	牡丹灯籠	1
菅原伝授手習鑑(車引き)	2	棒縛・与話情浮名横櫛	1
双蝶々曲輪日記(引窓)		(源氏店)	
隅田川統佛(法界坊)	6	義経千本桜(鳥居前)	1
東海道四谷怪談	2	義経千本桜(木の実・鮎屋)	5
絵本太功記(夕顔棚)	2	義経千本桜(河連館)	47

表4 文楽鑑賞演目表

演目名	人数	演目名	人数
妹背山婦女庭訓(通し)	3	祇園際礼信仰記	5
寿式三番叟・鎌倉三代記(米洗・絹川村閑居)・千本桜(吉野山)	3	生写朝顔話・鳴響安宅新関	1
		冥途の飛脚(淡路町・封印切)	15
恋女房染分手網	6	付・鳴神(歌舞伎)	8

歌舞伎の演目で観劇者の最も多かったのは『義経千本桜』の「川連館」47人であるが、「景清展」参加者はこれを越える58人、レポートからも真摯な見学態度が窺われた。景清の文楽人形や押隈、『壇浦兜軍記』の阿古屋の人形衣装、錦絵など視覚的にも美しく楽しめる資料も展示されていたので、学習効果も大いに上がったことと思われる。

さて、演目一覧表であるが、表1、表2で能と狂言を別個にまとめているが、実際の観劇は一度に狂言一番と能を一番か二番見ているのである。アトリエ狂言会のように狂言だけの上演もあるが、各ジャンルとも同日に複数見た場合はすべて同じ欄に併記してある。

一幕見で問題があったと前述したのは、『義経千本桜』の序幕「鳥居前」だけを見たような場合で、初心者が短い一場に後の筋への伏線が張られているドラマの発端だけ見て帰って来てしまったのでは、さぞ心残りであったろう。「食わず嫌い」ということがあるが、一口食べて嫌になったら二度と食べる気はしない。歌舞伎のように種々の演目を持つ演劇の場合、初観劇の作品いかんで、歌舞伎の好き嫌いが決まりかねないのである。幸い「鳥居前」は舞台が派手で役者の動きも分かりやすく楽しいものなので、レポートには眠る暇もなかったと書いてあったが、出来ればより有効な一幕を勧めたかった。

一方文楽はなんといっても東京では観劇の機会が少な過ぎて、演目も三年間に表4の程度である。今後は講義時にビデオなどを活用してもっと多くの作品を紹介していきたいと思う。

### 3 学生のレポートから

最後に受講者のレポートから、一般的なもの、特徴的なものなどの抜粋をできるだけ多人数分掲載し



教・美術 阿部京子

てこの拙い報告を終わりたい。

A 能・狂言について

- 初めて能を実際に見たが、授業のビデオで先生の解説付きというのと違い、やはりよく分からず、終わってしまったという感じだった。ただ、能は前に見た狂言と違い、面や衣装がとても美しいことに一番目がいった。・・・中略・・・狂言はどんな作品を見てもほとんど解説なしで楽しめるものだとあらためて感じた。

(教・初音・高橋真理)

- 狂言の方は、見ていて内容もよく分かり、甥と伯母のやり取りが面白かったのであるが、能はといえば、狐と宗近の会話も難しく、しかもバックに音楽と歌(囃子と謡)も同時に聞こえてくるので、どれに耳を傾けたらよいのか、声を聞き分けることもできずに終わってしまった。

(人科・大石睦子)

- やっぱり能はいいなあと思いました(観劇経験あり)。演者が少し若すぎて、神秘的な魔力のようなものに欠けるような気がしましたが。演者も神懸かり・狂気のようなものを持っていないとつまらないと思います。

(文・中語中文・小林詩子)

- (能は) 笛と小鼓と大鼓の三つしか使われていない。だが、音楽を聴いてみると「よー」とか「ほーつ」とかいう掛け声が、もう一つの楽器のように聞こえた。・・・中略・・・景季のはなやかさ、動きの激しさ、足踏み、それと激しくならず小鼓や大鼓。すべてが一体となつてとても迫力があつた。それまでの動きの少なさや柔らかさというものと比べると、より激しく動く景季はとても目を離すことができなかつた。

(人科・入谷まゆ美)

- 今の時代、女性が強くなり、男性が尻に敷かれているなどよく言いますが、昔に作られた物なのに、今でも違和感が無く見ることができるのは、男性中心だった昔の日本においても庶民の中にはこのような様子（恐妻）もあり、やはり変化することはないんだなあと思いました。  
(文・英米語英米文・村岡さゆり)
- 狂言の笑いは現代の俗っぽい軽薄な性質の笑いではなく、心身ともに健康で大らかだ。音楽的リズムをもったものでもある。  
(文・中語中文・倉林仁)
- 白羽の矢により未婚の女性が懐妊するというのは、聖母マリアに近いものを感じた。  
(文・中語中文・栗原俊也)
- 瓜盗人が畑に入る時にそこにある柵をのこぎりで切る音が「ズカズカ、ズカズカズカ」というふうになっていた。のこぎりを使う時の音は「ギーゴギーコ」という感じのものだと思っていたので、これは何か時代を感じさせながらも新鮮だと思った。  
(文・中語中文・熊野敬章)

## B 歌舞伎について

- 酒におぼれてしまっただけとはいけませんが、妹を無実の罪で亡くした悲しみからの回避をはかる宗五郎には、時代など関係ない人間の精神がみえる。  
(教・美術・金久保友子)
- 今回イヤホンガイドをやりながら見ていたのですが、とても分かりやすい解説で、少し人間関係が複雑だったけど、すごく楽しめました。こういうサービスは英語のガイドもあるし、日本文化により親しめてとてもよいと思った。  
(人科・加藤亜矢子)
- 私が、この鳴神が籠釣瓶よりも数段良かったと、歌舞伎に関しては

ど素人なのに言えるのは、やはり盛り上がる場面である、鳴神上人が雷神となり、怒り狂い、大暴れをする場面に目を奪われたからである。激しい色の隈取の顔が豪傑ぶりを表しており最高だった。雷神らしい力強い動きなども大きくかつスローな動きでよく表現していると思った。

(教・特殊・馬目淳)

- 歌舞伎は重苦しく分かりづらいという先入観を持っていた私だったが鳴神は、そんな人々にお勧めの作品に違いない。

(文・日語日文・角屋珠貴)

- 舞台装置の他に細かく観察したのは、役者の服装です。登場人物の中でも、義経と静御前は、他の人よりやや派手で目立つ感じがしました。また、・・中略・・亀井六郎は、肌がオレンジ色、着ている物には緑などが使われ、足は黄色と、派手な格好。駿河は全体が白や黒ですっきりとまとまっていました。この服装一つにしても役柄の個性というものが感じられ、とても興味深かったです。

(文・日語日文・岡野啓子)

- 狐が忠信という人間に変身し、自分の親の皮で作られた鼓を人間から返して貰う芝居でした。すなわち狐の親孝行でした。孝という言葉が失われていく現代社会で、人間として印象深く感じました。

(文・中語中文・金甲寅)

- 観劇の最中ふと思ったのだが、あの役者達が行う「見得」というもの、あれは恐らく、子供向けテレビ番組「ゴレンジャー」シリーズの中に受け継がれていたのではないだろうか。あの主人公達の「きめポーズ」はまさに歌舞伎のものである。

(文・中語中文・東堂貴幸)

- 下座音楽が大きすぎて、セリフがききとりにくいところもあった。

C 文楽について

- 今回初めて文楽というものを見たが、人形が普通の人間と変わりなく、スムーズに動いているのにびっくりした。ただ、あらずじとせりふを同じ人がやっているために、今誰のせりふだろうかと思ってしまうところもしばしばあった。

(人科・山口康之)

- 子供の声が面白かった。小さい舞台で人形を三人で一つ操るとずいぶん人口密度が高くなってごちゃごちゃするなと思った。この話でのしゃべり方がかん高くて良く響いていて一番楽しかった。

(教・美術・稲富真理)

- 輝若が乳母に水を飲ませようとする場面で、太鼓の音がポンポンと鳴り水の流れを表す。その後「後の哀れを知らぬ子が・・・」と不吉な語りがあり、ドンドンと次第に速くなる心臓のような足音が響き、侍従のショックと動揺を表す。舞台では現せない目に見えないものを「音」を使い、舞台に一層雰囲気を出している。

(文・中語中文・今野理美)

- はじめのうちは何を言っているのか、さっぱり分からずかなりあせったが、あらずじ書きを必死に読んで理解しいしい聞いていたので内容は理解

(人科・萩窪悦子)

これは「日向島の段」の景清にのみ用いられるそうです。



日文・岡野啓子



↑面がこのように顔のかなり前の方だけにしているところ初めて知りました。

できた。

(教・美術 仲上志帆)

D 「景清展」について

- 日本人は他人の真似をするのが上手くていつのまにか自分の物にしてしまうという見方があるが、浄瑠璃に関しては、これほど日本人らしい文化はないのではないかと思う。……中略……自分を先ず知ってから他を見なければ本物を見たことにはならないのだと思った。

(文・英米語英米文・藤田博恵)

- 「景清展」で様々な展示を見て、能や歌舞伎の歴史に触れられた様な気になりました。……中略……文化というものが歴史の点上にあるのではなく、線となって続いているのだと実感できます。

(文・日文・中嶋由香里)

以上、全体からみるとほんのわずかな例しか紹介できなかったが、これらに見られるような新鮮な感動や素直な反応が、より深い鑑賞眼に発展できるように、学生達が受講後も古典演劇に対しての関心と鑑賞の場を持つように願っている。